

ーズにいくか否かの発達の程度や個人差に関し、主として対人態度と対人意識との2つの視点を含んでいるように考えられ、簡単に規定づけることはむずかしい問題である意味の説明があった。

幼稚園の音楽・音響的設備をめぐる玉岡の発表考想には、ことばの研究者としての内須川（東学大）の関心から、音響と音声との関係が問われたが、これに対して両者は根本的には同じだと返答があった。これ以外には幼稚園における音楽教育の目的など、きわめて原則的な質

問が2・3あり、そのうち小森（名古屋大）は音楽と情操との関係について問うた。考想にもとづく実践的データが添えられなかったので討論を深めるまでにはいたらなかった。

以上のように個々の研究についての質疑応答を中心とした熱心な討議に止まったが、さらにいくつかの研究に共通した根本的な問題点を総合的に発展し、討論を深めるまでには時間的余裕がなかった。

（池田義徳・南館忠智）

500 社会性と人間関係 (521~9)

座長 三宅和夫
古沢頼雄

521 子どもの発達にともなう母親の保育意識

—乳児家庭保育の研究—

○榊田正子（洗足短期大学）

松井とし（お茶の水女子大学）

522 子どもの行動と母親の行動の Interaction

—乳児家庭保育の研究 その2—

○松井とし（お茶の水女子大学）

榊田正子（洗足短期大学）

523 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ発達(2)

三宅和夫（北海道大学）

524 親子関係の形成過程に関する研究(Ⅲ)

○古沢頼雄（日本女子大学）

大野悠子（〃）

525 家庭における子供の学習活動と親の養育行動

との関係(1) 問題と方法

(発表取消し) 宮川知彰（東北大学）

野呂アイ（〃）

佐藤克夫（〃）

松井匡治（仙台大学）

526 家庭における子供の学習活動と親の養育行動

との関係(2) 小学校低学年の場合

○野呂アイ（東北大学）

佐藤克夫（〃）

宮川知彰（〃）

松井匡治（仙台大学）

527 家庭における子供の学習活動と親の養育行動

との関係(3) 小学校高学年の場合

○松井匡治（仙台大学）

野呂アイ（東北大学）

佐藤克夫（〃）

宮川知彰（〃）

528 家庭における子供の学習活動と親の養育行動

との関係(4) 中学校の場合

○佐藤克夫（東北大学）

野呂アイ（〃）

松井匡治（仙台大学）

宮川知彰（東北大学）

529 性格検査における親子の類似性

稲田準子（広島女子大学）

I 全体的特徴

この部会の研究発表については、内容的に3つの傾向に分けられた。第1は、乳幼児期における親(母)子関係に関するもの(521, 522, 523, 524)、第2は親の養育行動と子どもの行動の様態について検討したもの(526, 527, 528)、第3は性格検査にあらわれた親・子の類似性について検討したもの(529)である。

従って、いわゆる親子関係のとらえ方、さらには、そこで展開すべき方法論的わくぐみなどについて、各発言者がさまざまなかたちで触れていった。また、この人間関係をより微視的に考え、そこにおける過程を明確化していこうとする試みがなされてきていることも特にとりあげておくべきことといえよう。

II 討論の内容

521, 522の発表に関しては、岩城(西南短大)から、今回の研究においては、例数がごく限られているように見受けられるが、より普遍的なものにするための配慮は

どうかという点が、また内須川(東京学芸大)、金田(日本福祉大)、筒井(信州大)などから、実際場面より後になって質問されたのに対して解答する意識内容と行動時の意識には差異があると考えられるがなどの点について質問がなされた。例数については今後の問題であるとしても、とくに、いわゆる意識化された保育意識と防衛的な心理作用を含んで表現される現実の保育行動との違いについては、今後十分検討されるべき問題であろうとの提言が質問者らからなされていた。また、観察者側で同時に意味記録をとり、保育者自身のそれと対応させてみてはどうかという意見も出された。また、このような研究においては、その過程において保育者自身の内的変化、つまりは、保育意識の変容を動機づけるような動きそれ自体が含まれている意義は大きいし、むしろ、保育意識が広がり、深まる過程を明らかにしていくことが必要であろうという意見も出されていた。

523については、大滝(東京家政大)からとくに母子場面における行動観察の観点が、また、内須川から評定者の性質について質問がなされたが、これに対して発表者から、観察場面・観点についての具体的な説明が、また、評定者については、多いほど望ましいと考えるが、現在までのところ男性・女性おのおの2名ずつで実施していると解答された。

524については、発表者の意図している親子の交絡関係を受け取り方と行動との関連でとらえようとするのが、今回の発表ではどのように生かされているか、また、子どもの変数の評定選択肢はどのようになっているかなどの諸点について、中原(茨城大)より質問がなされたが、発表者は、資料整理の進行上意図を着実に表現するような発表になっていなかったと答え、さらに、選

択肢の具体的実例をあげて、子どもの変数のとりあげ方を説明した。

526, 527, 528については、子どもの言語的な環境の意味をどのようにとらえているかという点が、内須川から質問された。これに対して、発表者は、子どもの行動と物理的環境とに介在する親の子どもに対する言語的な表現ということで、たとえば、ほめるとかしかるということを中心にとりあげていきかかったという解答がなされた。この研究においては、子どもの行動として、とくに、学力ということをとらえていたが、親のもつ変数がどのような過程を経て、子どもの学力につながるのか、その中でとくに親と子の言語的な相互関係をなぜ重視しなければならないのかなどについて討論がなされた。

529については、親と子の性格の類似性を性格検査の結果の類似度によって論じているが、両者の関連を明らかにすることがどのような方向に結びついていくのかという質問が田中(信州大)からなされた。また、中原は、子どもの人格として表現されるのは、親自身のあらゆる手がかりよりもむしろ子ども自身が認知した親の姿であって、その中で子どもが親の側から受容れた人格ということの意味がはじめて明瞭になってくるのではないか、その点、独立してとらえた、いわゆる、現実の類似性というのはどのような意味をもっているか疑問だなどの討論がなされた。

全体的にみて、このような人間関係のとらえ方、さらには、子どものもつ諸変数への意味などについてかなりつっ込んだ討議があったといえよう。

(三宅和夫・古沢頼雄)

500 社会性と人間関係 (531~7)

- 座長 内須川 洸
原 岡 一 馬
- 531 1人子の幼児における母子言語関係について
内須川 洸(東京学芸大学附属
特殊教育研究施設)
- 532 父・母・子の話し合い過程の分析(3)
一子どもの年齢による差について(1)―
大 滝 ミドリ(東京家政大学)
- 533 登校拒否傾向の要因分析(1)
原 岡 一 馬(佐賀大学)
- 534 Over・Under Achieverの要因分析(1)

- ―親の養育態度を中心として―
- 篠原 しのぶ(中村学園大学)
阿久根 求(九州大学)
梁井 迪子(福岡女学院
短期大学)
- 535 Over・Under Achieverの要因分析(2)
―テスト不安 適応性を中心にして―
- 阿久根 求(九州大学)
篠原 しのぶ(中村学園大学)
梁井 迪子(福岡女学院
短期大学)